

J.-G. ノヴェール『手紙』(1760)における舞踊の語り——アクション概念の検討を軸に

川野恵子 (神奈川県立近代美術館)

本発表は、ジャン=ジョルジュ・ノヴェール (1727-1810) の『舞踊とバレエについての手紙 (Lettres sur la Danse et sur les Ballets)』におけるアクション概念について考察する。ノヴェールは今日まで「バレエ・ダクシオン(筋立てバレエ Ballet d' action)」の提唱者と位置づけられてきた。つまり、「アクション(action)」は「筋立て(intrigue)」と理解され、ノヴェールの功績は、舞踊作品における筋立ての導入に見出されてきた。しかし、今日の研究では、舞踊への筋立ての導入は当時の他の振付家も試みており、とりわけノヴェールを嚆矢とみなしえない事実も指摘されている。

もとよりアクションが舞踊作品における基本概念だとしても、この概念が伝統的文芸論における作品制作と演劇論における身体表現にかかわる二重性を持つことは明らかであろう。従来の『手紙』の研究も、この二重性を同時代の思想背景から解明してきた。言い換えれば、アクション概念をあくまで『手紙』のテキストに即して分析する研究は、管見によれば乏しい。そこで本発表は、『手紙』(初版 1760 年)に 119 回も頻出するアクションという語を、改めてテキストにもとづいて検討し、その素地と射程を考察する。

まずアクションが、ダンサーの演じる人物の内なる情念の発露としての外なる身体表現について用いられている点を重視しよう。当時、舞踊作品に筋立てがあることは一般的であり、ノヴェールが否定したのは、その筋立ての進行を口上や装飾の寓意的な表現に委ね、ダンスを技の余興的な披露に終始させてしまう作品である。ノヴェールが要請するのは、観念的寓意的な素材 (sujet) を扱う詩ではなく、身体表現に適した情念 (passion) を扱う詩であり、そうした詩を台本として設定すればこそ、詩に託された情念が「外側に出現し」、身体の相貌、身振り、動きが生き生きと成立する。この相貌、身振り、動きがアクションにほかならず、これを引き出す詩を語りかけることがダンスなのだという。

第二に、アクションがより全体的な舞台構成について用いられている点に注目しよう。これはアリストテレス的な作品の統一性にかかわるアクションといえようが、『手紙』において重要なのは、このアクションという語がしばしば「関心(intérêt)」という語と並置されていることだ。ノヴェールは、舞踊作品において筋立ての統一がいかにも正しくとも、寓意的衣装や朗唱などの明示的な言語の介在は「アクションを冷やし、関心を弱める」と否定した。舞台空間とはあくまで、遠近法や色彩の推移を駆使し、自然を完全な纏まり (un ensemble parfait) として美化したイリュージョン世界でなければならない。だからこそ、纏まりを好む観客の目を魅惑し、関心を喚起して(intéresser)はじめて、詩を舞台空間において語る事が可能になる。実演家でもあったノヴェールは、関心を喚起し、詩を語って纏まりある一場面をとりわけアクションとして主張し、実例を交え詳細に論じた。

さらにこれら二つのアクションの達成は、読むこと (lecture) では冗長な台本(詩)を「生き生き(vif)と活気づけ(animé)」、また「新しく(nouveau)」する効果を持つという。この点において、『手紙』の最も重要な概念のひとつというべきアクション概念は、言語芸術よりも優れた舞踊芸術の語りの特徴を示し、ノヴェールの舞踊思想の根幹をなしていると理解すべきなのである。